

イエスは弟子たちに対して「わたしは去っていく」（28節）と告げています。弟子たちは、全てのものを捨てて、自分の生涯をイエスにかけていたと言っても過言ではありません。人にできないようなことをされるイエスに従っていることは、他者のうらやむことで、誇らしくも思えたことでしょう。ですから、そのイエスの死を予感させられることは、彼らがイエスのなかに見出していた確かなものが消え去り、拠り所を失ってしまうような不安を抱かせたに違いありません。

そんな彼らに対してイエスは、「心を騒がせるな。おびえるな」（27節）と語ります。なぜなら、「また、あなたがたのところへ戻ってくる」（28節）からだということです。確かにそれは慰めです。しかし一体、どこで彼らは、そして私たちはイエスと再会できるのでしょうか。イエスはこうも語ります。「聖霊が、あなたがたにすべてのことを教え、わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる。わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。」（26～27節）。イエスは、この世を去った後も、私たちがイエスと出会えるように、あるものを残していかれました。それは、「わたしが話したこと」、すなわち、私たちに「平和（平安）」を与えるイエスの言葉です。では、聖書に記されたイエスの言葉を読むことが、直ちにイエスと出会う出来事に直結するののかと言えば、そうでもないようです。

注目すべきは、イエスが「事が起こったときに、あなたがたが信じるようにと、今、その事の起こる前に話しておく」（29節）と言われていることです。イエスは、ご自分の死に直面して弟子たちが恐れや不安を抱くときを想定して、言葉を残されたのです。私たちは、自分が相手を傷つけてしまったとき、「敵を愛しなさい」というイエスの言葉を、自分の行くべき道を見失ったとき初めて「わたしが道であり、真理であり、命である」といったイエスの言葉を、切実に、平安の内に受け取ることができるのでしょう。なぜなら、それらの言葉はすべて、他の誰よりも私たちの痛み、苦しみ、孤独、そういったもの味わい尽くされた方の言葉であるからです。

ですから今は、「事が起こったときに、あなたがたが信じるように」とイエスが残してくださった言葉を聞き続けたいと思います。そして、この主の言葉に押し出されていきたいのです。「心を騒がせるな。おびえるな。さあ、立て。ここから出かけよう」（31節）。

（文責：望月達朗牧師）

